

行事報告

天草地学巡検参加記

出水中 宇野 一也

8月1日午前7時、熊本駅にて出席の届出を甲斐先生にすまし、三角線に乗車。車中左右に足ごしらえも厳重なる同好の志、三々五々と見渡される。

三角より本渡行きの渡航船に乗船。甲板上にはそれと覚しき女性の姿、学生あり、中には小学校位の小さい子供より、御老人と申してはお叱りをうけようか、御年輩の方の姿も見受けられ、今更ながら参加層の厚さにびつくりする次第である。

船は大矢野島の間を通り、松島を散見、大浦に着く。一行百余人の下船したる船は、閑散として本渡へ。我々は、大浦より産交バス三台に分乗する。第1号車は田村先生を指導者にほとんど熊大の学生、第2号車は今西先生、第3号車は永井先生を指導者に小・中・

高の先生、一般の方各々約50名、総勢140名余にて、七島の狭い古第三紀の泥岩砂岩を含む教良木層の間を車は走る。山間の道に、天草の感を一入深くする。赤崎を過ぎ、海岸に沿つていく。右手の海の中に、遠く湯島の溶岩台地を眺め、一時停車、思い思いにカメラに収める。今までの遠い屋島の溶岩台地が、急に身近くなつた感じである。車中、今西先生より途中の地層・年代について色々と注意説明があり、車は島内唯一の水のある七津浦、平を過ぎ、大島子の扇状地を望見、次いで間伏の海岸段丘を車中よりカメラに撮る。車中の標として、どのような物がとれたか一応心配ではある。志柿を過ぎ、初めての化石採集地である一町田海緑石砂岩層に到着、砥石層の上に乘る砂岩に挑む。めいめいハンマー・タ

ガネを持ち、カツンカツンという音を立てながら石を割り、貝化石の採集を行う。「あつた」と言う声は1・2回聞かれたが、ほとんどなく、砥石層のヒの一町田層の落石を見つけては、皆思い思いにハンマーを振っている。なかなか化石は出て来ない。掌は赤くなる。約30分でふたたび乗車の合図。熱心な先生か、1人崖の中腹まで登っておられる。

開閉橋を渡り本渡に到着。産交停留所の近くの食堂にて昼食。12時30分乗車。一行は千人塚に参り、切支丹宗徒の悲運をかなしみつつ一路富岡に向う。もつとも若い佐伊津層の赤茶けた砂礫層の間を通り、御領に着く。御領中学の近くの阿蘇溶結凝灰岩を遠望、ふたたびその下部佐伊津層の下の白色凝灰岩の間を速度を落してゆつくり通る。はるかに遠き阿蘇の活動の様(さま)の激しさを思い、阿蘇溶結凝灰岩、佐伊津層、白色凝灰岩の時代考察をさせられる。日の光降りそそくなか、官津を過ぎて停車、若き佐伊津層の石化しようとしている海岸の露頭を見学する。赤茶色の地層は美しく、中の偽層にも興味をもちつつ、次いで北に傾斜する古第三紀坂瀬川層の黒色頁岩中の岩脈のところでもふたたび降車、堤防を乗り越えて海岸の現場に向う。黒の中の白い陶石、ヒ島に南北の方向に走る割れ目に貫入する陶石脈、スケールとしてハンマーを横たえてカメラに収める人の姿が目立つ。車は一路北海岸に沿って走る。車中、有明海で採集された鯨の化石の話に興味深く聞き、やがて富岡へ着く。町並を過ぎ展望台へ。台上より富岡の陸繋島に思いをめぐらし、幅150m余りの砂州に出来た町並、また、東の方有明海にのびる砂嘴を望見し、珪化木を採集の後下山、早々に宿につく。夕刻、石を整理、リュックを収め翌日の準備をなす。

8月2日 朝小雨。富岡は3日が慣例の蹠狩りとか。車中の人となる頃には、幸しか雨止む。竹の迫坑の坑口近くを通り西海岸を一路南下する頃に、山は海に迫り、山肌には白亜または古第三紀といわれる黒灰色の巨岩

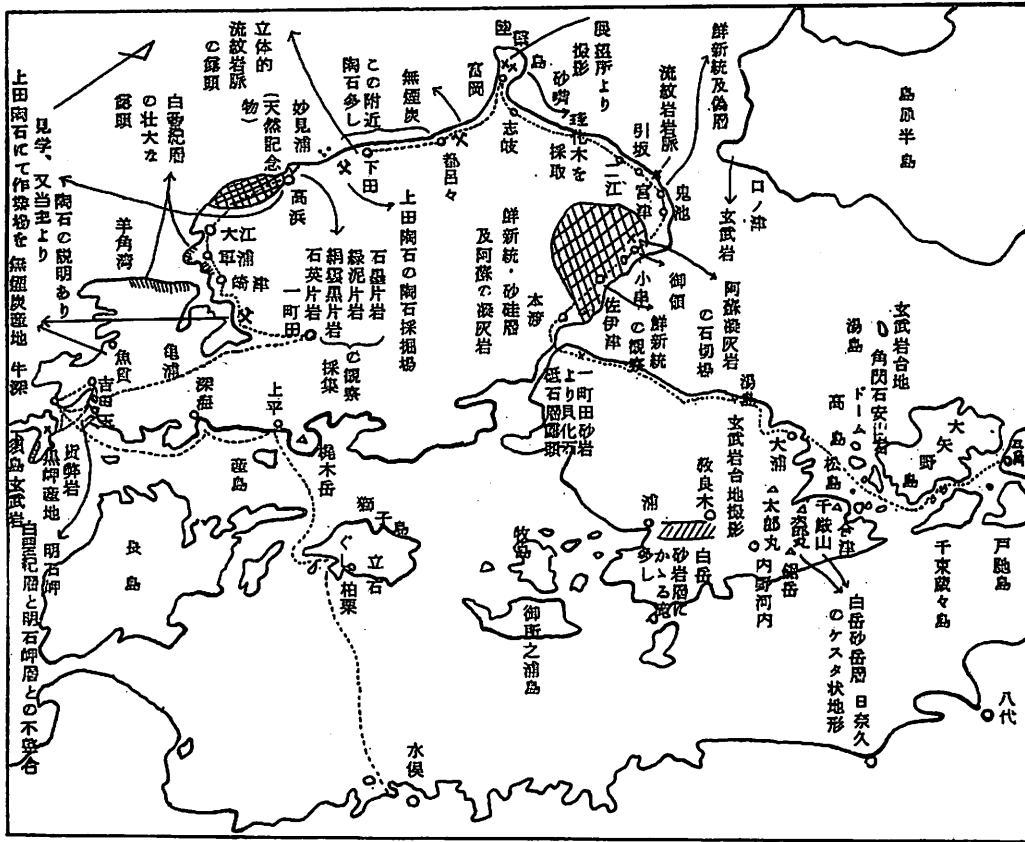
がほとんど垂直近く傾斜して道をおおい、道の下はるか下方に海蝕崖を望み、速く「雲か山か」の頼山陽の時に東支那海に見入るのである。

下田に着き、上田陶石社長の先導にて、リソタイトを見学する。岩脈は幅20m、その中に垂直な真暗く口を開けた採掘跡がみられる。岩脈の冷却時の節理について、再びうなずかされるものがあつた。次いで高浜に至り、社長より懇切なる陶石の研究史および試験場を見せていただく。試作品の純白ほうろうの如き湯飲みを分けていただく。途中、鬼界が浦近く、妙見浦にて休止、海蝕洞・海蝕崖を見んものと坂を下り、波打ち際を通り祠に至る。洞穴の中で砂岩中の石灰分の鐘乳石化したるものを採集する。高浜の海岸で変成岩の採集を行う。民家の石垣の石もすべて変成岩である。海岸の岩壁にて、田村先生・今西先生の指揮で採集に入る。片理に当てハンマーを振るもなかなか割れない。緑色片岩・絹雲母片岩・石墨片岩等格好の好材料なれど苦心して採集を終る。中には大きなものを取り、リュックにやつと入れる者もあり、重くてもと思う心は、まことにほほえましいものである。高浜より西の海岸線は、4・5日前にやつとバスの開通があつたばかりと聞く。

次いで、山間の通をバスが通る。切支丹宗徒の墓に涙をさそわれ、坂を下り道を曲り、赤崎層のきれいな褐赤色泥岩層を左右に見ながら、軍ヶ浦に出る。そこには、延々と入る半角湾の素晴らしい景観あり。道端に露出する姫浦層と覚える泥岩・砂岩の急傾斜の露頭で一時停車。夢中でその様をカメラに入れる。自然界の力、堆積岩の厚さに驚く。姫浦層、砥石層と移るうちに、天草の水不足・半角湾の淡水化計画を聞き、水の深刻さ予想以上なるを考えさせられるものあり。いつしか湾とも別れ山間に入る頃には、連日の疲れが車中「コックリ・コックリ」。やかて久玉に着くも船の連絡悪く牛深に向う。一応旅館にリュックを降し、産交バスとも別れ、4時過ぎ巡

天草島巡検コース

- 第1日(8.1): 大浦に集合—本渡(昼食)———鬼池經由富岡(泊)
- 第2日(8.2): 富岡——高浜(昼食)———牛深(泊)
- 第3日(8.3): 牛深——柏栗化石採集場(昼食)—水俣(解散)



第1号車	指導者	熊大(教育)	田村	実
第2号車	"	熊大(理)	今西	茂
第3号車	"	九州女学院	永井	剛
会計その他世話人		西山中学校	甲斐	有男

視艇「ちどり」にて明石岬に向う。乗船できるのは学術調査の故か。岬にては、小舟にて上陸し、姫浦層の黒色頁岩の上にのる古第三紀層との間の不整合面を見学、スライドとする。ふたたび下須島へ向い、崖下で硬質頁岩中の砂岩に貨幣石をやつと探しあてた。後は巻貝の化石、貨幣石と存分に採集した。中には、細でくくり、3、4人で運ぶ女性の姿も見られる。牛深へ。自衛隊の隊員の方々は、さぞかし大きな収穫と思ひしに、案に相違して妙な石ころばかりに微苦笑か。6時過ぎ、やつと旅館に着く。リュックの中は重くなるのみ。

8月3日 5時起床。6時半発の定期船にて獅子島へ。甲斐先生60円の弁当の御世話に相当心配されている様子が下がる。船はやがて下島の東岸の断崖を望見しつつ島と島の間、紺碧の海を走り幣串に着く。リュックを民家に預けて引舟に乗るも動かず。歩く

者舟で行く者、別れ別れに柏樂に向う。

海岸の岩に注意してみると、至る所に無数の三角貝が散在し、とくに地層の一定の面に集中的に多し。写真にとるもの、ハンマーを振る者、皆硬質頁岩に汗を流す。照りつける太陽の下で唯一途に採集。1つでも2つでも良い物を採集したいとの願ひに、1時間、2時間と岩に挑む。中には、手を打つもの、ハンマーの折れるものあり。しかし、手を休めず良い標本に歓声をあげる様、その純なる姿には心を打たれるものがある。

3時過ぎ、定期船にて水俣へ。3日間の探求の成果をリュック一ぱいに、また、天草の地向斜、本州弧、琉球弧の錯走せる天草の地形に触れることができた。田村先生・今西先生・永井先生・甲斐先生の御指導と御世話に感謝しつつ再会を約して帰路についたのである。